もうひとつのポストコロニアル文学
——アルベール・メンミの初期小説に見る族外婚

有　田　英　也

はじめに

本論はアルベール・メンミ（1920–）の 1950–1960 年代の小説[1] を、ポストコロニアル文学[2] として読み直そうとする。というよりむしろ、植民地独立の過程で執筆され発表された小説をあらためて読み直すことで、ポストコロニアル文学に「もうひとつの」接近法を試みようとする。

本論でポストコロニアル文学は、その書き手と言語と主題によって特徴づけられる。これから扱われる小説は、みずからを被植民者（colonisé）と定義するチュニジア出身の作家によって、母語である口語アラビア語ではなく、旧宗主国の言語であるフランス語で書かれている。また、メンミは専門の哲学および社会学の著作で植民地状況を論じる前に、小説によってみずからの経験を理解しようとした[3]。本論が採りあげる主題は、植民地出身の青年が、メンミ自身の言葉を用いれば族外婚（mariage mixte）の結果、ヨーロッパ人女性を連れて独立前夜のチュニジアに帰郷する物語である。メンミはあえて学術的な「族外婚（exogamie）」ではなく、異文化間の通婚一般に通じる日常的な語を用いている。宗旨が同じでも身内から結婚相手を選ぶのが内婚、外部に探し求めるのが外婚だから、メンミの言う「族外婚」は国際結婚に近い概念だろう。この時、言語の壁は、新妻と周囲のあらゆる人々との間に立ちはだかる。夫婦の間も同様である。このように、メンミの初期小説は、その書き手の位置、言語の複数性と階層性、そして主題の普遍性から、ポストコロニアル文学の再検討を促すかもしれない。

だが、次節に見るように、ある小説をポストコロニアル文学と言うとき、書き手の出自と使用言語だけでなく、その語り口が問われるだろう。また、何より作者とその作品が、旧植民地の独立後の状況とどう関わっているかが

問われよう。メンミの作家活動はこれらの点で問題含み（problématique）なので、作品の前に、作家像を検討しておく必要がある。

1. 評論と小説に分岐する作家像

メンミは、マグレブ出身フランス語作家のうち最長老の一人である。彼の名は、とりわけ祖国チュニジアが独立した翌年にパリで出版された評論『被植民者の肖像』（1957）で知られている[(4)]。邦訳は 1959 年に『植民地――その心理的風土』というタイトルで出版された。第三世界と呼ばれた旧植民地の新興国の社会を、内在的に描いた評論として、サルトルの序文の効果も相まって広く読まれたようである。最近では、脱植民地プロセスの暗い側面を描いた評論『脱植民地人の肖像』（2004）の邦訳が『脱植民地国家の現在――ムスリム・アラブ圏を中心に』というタイトルで 2007 年に出版されている[(5)]。イスラエルのパレスチナ占領統治の犠牲者を、ルワンダとビアフラにおける虐殺と 1990 年代のアルジェリア内戦における 15 万人の死者と比べて「あまりに少ない」（dérisoire）、と『若いアフリカ』誌のインタヴューで答えるメンミを[(6)]、「ポストコロニアル作家」と呼ぶことには抵抗があるかもしれない。中東・マグレブ諸国の脱植民地化プロセスの重要なファクターであるはずのイスラエルが素通りされていることには、訳書を評した石川清子氏も注意を促している[(7)]。

ポストコロニアル作家メンミという表現の収まりの悪さの理由は、その経歴にもある。馬具職人の子として生まれたメンミは、世界ユダヤ連盟の経営する小学校に入る 7 歳までフランス語を知らなかった。だが、ユダヤ人共同体の奨学金を得て、リセ（高等中学校）カルノーに進み、第二次世界大戦直

後にソルボンヌの哲学科で学び、帰国してチュニスの技術リセやリセ・カルノーなどで哲学教員をした。だが、この帰郷中にパリで出版された小説第一作『塩の柱』（1953）がパリで出版され、チュニジアのフランス語文学の存在を内外に印象づけた。同作はチュニスでカルタゴ賞（1953）、パリでフェネオン賞（1954）を受賞している。おそらく、この作品の成功のおかげで、メンミはパリに赴いてカミュ、サルトルら、やがて自著の序文を書くことになる作家の知遇を得た。チュニジア独立（1956）の直後にフランスに移住したメンミは、祖国のポストコロニアル状況をつぶさに見聞していない。妻ジェルメーヌ（Germaine Dubach）はフランス人で、ドイツ語の上級教員資格を取り、後にパリ第 8 大学の教授になる。メンミは、フランスに戻ると国立科学研究センター（CNRS）に所属して高等学術院、高等商学校（HEC）で教鞭を執り、1970 年からはパリ大学ナンテール校で社会学を講じている。フランス国籍は 1967 年に取得した。このように、メンミはむしろマグレブ出身の知的エリートという括りに入りそうである。

加えて、田所光男氏が指摘するように、メンミは「アラブ＝ユダヤ共生言説」の批判者である[(8)]。この思考の枠組みによれば、オスマン＝トルコ時代にマグレブのユダヤ人はアラブ人と平和裡に共存しており、反ユダヤ主義は植民者がヨーロッパから持ち込んだのであり、さらに中東とマグレブではイスラエル建国（1948）によって初めてアラブ人とユダヤ人が対立を始めた、とされる。さらに、植民地主義こそ諸悪の根源であり、イスラエルの占領地入植、いや建国さえもが、植民地主義への逆行と見なされるだろう。この「アラブ＝ユダヤ共生言説」を、メンミは評論『ユダヤ人とアラブ人』（1974）以来、宗教的・民族的マイノリティーとしてのみずからの経験をもとに一貫して批判しており、それが 2000 年刊の回想記『動かないノマド（放浪の民）』

にも受け継がれている[9]。

それでは、1980 年代に社会党政権が掲げた外国人の地方参政権や、移民第二世代を基盤とする人権団体 SOS ラシズム、そして 1980 年代末に始まる「ムスリムのスカーフ」問題に、評論のメンミはどう向かいあったのだろうか[10]。アラブ＝ムスリム系移民およびその第二・第三世代をめぐる議論は、フランスにおける市民権と宗教的アイデンティティーの相克と要約できるかもしれない。冷戦終結以後のメンミの言説は、『脱植民地人の肖像』（2004）と『失礼な遺言』（2009）、そして刺激的な大著『不信仰者のための批判事典』（2002、2017）からうかがい知れる。また、このほど時事評論集『むき出しの思考　植民地制度から世俗主義まで』（2017）がまとめられた[11]。本論の伝記的部分は、評論集所収の略年譜と最新インタヴュー（2015 年 10 月–2016 年 12 月）に依る。

これらの議論は本論の目的である初期小説再読から逸脱する。さしあたりメンミが、文化の定義をめぐる議論で宗教に対して節度ある役割を求めており、また個々人が個別性と一貫性に固執するあまり、自己の複数性と他者の異質性を軽視しないよう戒めていることを、『失礼な遺言』の第 5 章「アイデンティティーは同一ではない」と第 8 章「文化を脱神聖化せねばならない」および『批判辞典』の「人間主義（Humanisme）」の項の叙述から指摘しておく。

また、評論家としてのメンミは、イスラエルの安全保障に配慮し、民族的同胞である全世界のユダヤ人との絆を感じている[12]。そのため、ユダヤ系フランス知識人メンミには、小説を書く際に、旧植民地出身作家一般に通じるかもしれない生地とその住民への愛着とは異なる指向性が予想されよう[13]。つまり、脱植民地人というアイデンティティーはメンミの唯一の属性ではな

く、また常に属性であったわけでもない。「アイデンティティーは同一ではない」のである。

だが、メンミにはマグレブ文学の先駆的な案内役としての業績がある。彼は高等学術院のセミナーを元に、『マグレブ人フランス語作家アンソロジー』（1964）と『マグレブのフランス人作家アンソロジー』（1969）を編集し、プレザンスアフリケーヌ社から出版した。帰郷中の 1955 年にはチュニジアの週刊誌『アフリック＝アクシオン』の創刊に携わって文化欄を担当したが、これは現在の『若いアフリカ』誌の前身である[(14)]。文学者メンミは、紛れもなくポストコロニアル作家だった。評論と小説が与える作者像については、80 歳になったメンミ自身が『動かないノマド（放浪の民）』の緒言に書いたことを、少し長いが引用しよう[(15)]。

> 「私の著書はいずれも、一本の道の中継点になりそうだ。物を書いて人生の大部分を過ごしたことになるだろう。私にとって書くことは、しばしば松葉杖の役目だった。誰にもそれなりの松葉杖がある。だから、私の人生と仕事は呼応しあい、一方を語れば、他方を語ることになる。逆もまた真なり。あらゆる作品は大なり小なり自伝的である。まあ、私の作品が、他人のより自伝らしいとしておこう。自伝は、あらゆる人間的企図がそうであるように、何事かを誰かに言う試みだ。おそらく私は自分のことを説明したり、訴えかけたりする欲求が、人より強いのだろう」

たしかに、メンミの小説には、内容の自伝性と、語りの説明口調、そして作品のメッセージ性が強く感じられる。また、彼の評論の多くは、『あるユダヤ人の肖像』（1962）のように、体験に類型化を施した「肖像」である[(16)]。だ

から、評論と小説に見られる作家像は、分岐しつつも相補的といえる。だが、小説はフィクションであり、メンミ自身も主人公と作者の混同を戒めている。初期のメンミ小説の主題と語りはどのようなものだったのだろうか。

2. 3作に共通する出発のテーマ

小説第一作『塩の柱』（1953）は、チュニスのユダヤ人街ラ・アラ（la Hara）とアラブ人居住区の境界に住む馬具職人の父を回想する。当時のチュニジアはオスマン＝トルコの太守（le Bey）を戴きつつフランスの保護国になっており、臣民にはフランスで上級公務員になる道も開かれていた。口語アラビア語しか話さない両親の元で、少年はフランス人リセ（高等中学校）に進学する。だが、第二次世界大戦の緒戦、ドイツに敗北したフランスでは、ヴィシーに対独協力ペタン政権が成立し、政令でユダヤ身分を定めてユダヤ人を教職、マスコミ、出版、ラジオと映画の制作現場などから排除した（1940年10月）。

ポール・スバグの『チュニジアのユダヤ人の歴史』によれば、連合軍の北アフリカ上陸（1942年11月8日）の後、ドイツ軍はシチリア島に近いチュニジア東部を、1942年11月末から6ヶ月間にわたって占領する。すでにヴィシー政府の法令によって他の住民との隔離が始まっていたユダヤ人は、戦争の張本人と見なされ、共同体指導者がドイツ軍に人質として拘禁され、連合軍の爆撃による被災者への補償金と、戦火の下での瓦礫撤去や港湾の荷下ろしなどの強制労働奉仕がユダヤ人のみに課せられた[(17)]。小説では、優秀な成績でリセの最終学年を迎えた主人公は、中学の恩師からはアルジェ大学の薬学部を勧められ、自身はリセ教員の影響で哲学を志した。そして、リセの寄

宿舎で寮監をしながら、両親から独立して勉学を続けた。だが、戦争が始まると、青年は反ユダヤ法令の保護国での「適用を待たずに」、リセのポストを辞職した。ドイツ軍の占領期間の主人公は、大学生の身分によってユダヤ共同体で優遇されていながら、あえて「労働キャンプを志願した。だが、自分が無益だと知って脱走した」[18]。

戦争が終わり、上級教員資格試験（アグレガシオン）の受験資格を得た青年は、答案ではなく、これまでの人生を書く。つまり、この小説は、被植民者が宗主国の文化に同化されて社会上昇を試み、それを阻まれる物語である。主人公が故郷と両親を捨てて友人と南米に渡る決意をしたところで小説が終わっているのも、所属集団を裏切って社会上昇を図った個人が、ナショナリズムの天井に行く手を遮られたことの必然的帰結といえよう。

第二作『アガル』（1955）は、『塩の柱』の続編と言える[19]。タイトルは旧約聖書「創世記」で、妻サラに子が生まれないためアブラハムが第二夫人としたエジプト人の女奴隷ハガルに由来する。主人公であり、語り手のチュニジア人医師は、パリ留学中にフランス東部ロレーヌ出身のカトリック女性マリーと結婚し、新妻を故郷に連れて帰った。第二章で留学中のパリでの二人の出会いを回想する他は、物語は時系列に即している。作中人物の若夫婦はフランス語話者だが、その両親は「方言（le patois）」と記される口語アラビア語しか話せず、それがフランス語に訳されたことになっている。実際、妻は夫に通訳してもらわねば義父母の話を理解できない。夫婦に子供が生まれ、男児にユダヤ教徒として割礼を施すかどうか、そもそも異教徒の母が産んだ子はユダヤ人であるかどうかが、ユダヤ系弁護士、ユダヤ人信徒団体の代表を巻き込んで議論され、ついに妻が夫を置いてチュニジアを去ることが暗示される。

この作品で出発を体現するのは妻マリーだが、男性主人公の視点で物語られた一人称小説であるため、妻の決意には書き込みが足りない。

『サソリあるいは想像の告白』（1969）は、五人の語り手による一人称叙述で、独立前後のチュニジアを舞台として、イミリオ（Imilio）の書いた原稿を編集する形で物語られる[20]。馬具職人の父親とその後継者ビナ（Bina）の物語に、一族の歴史と、ヨーロッパ人女性と結婚した三人のユダヤ人の物語が絡む。ビナの物語では、もし職人の息子が『塩の柱』のアレクサンドルのようにリセを経て共同体から離れなければどうなったかが、急逝した父を継いで作業場の親方になった若者の苦労を通して語られる。これは出発しなかった青年の物語である。強制的に結婚させられた妹ヌーシャ（p. 103）と同様、ビナはユダヤ人共同体の内部でチュニジア独立を迎える。ビナは父にはそれなりに従順だった仕事仲間のバイザに、すっかり舐められている。なお、物語をメタレベルで論評するマルセルによれば、「ビナは架空の人物である」（p. 272）。

ヨーロッパ女性と結婚した三人とは、哲学教員のエミール、その兄で医師のマルセル、エミールの教え子の青年である。エミールとマルセルには姉妹のカラ、ライサがおり、前者カラは恋人と廃墟で逢引しているところを父親に見つかって殴られ、3 週間も寝たきりになった（p. 49）。後者は父親に反発し、16 歳で偽造旅券を使って出国し、（ユダヤ人のパレスチナ上陸を阻止する）イギリス軍に捕らえられてローデス島に収容された後、「肩に銃を乗せて生きる」（p. 50）ようになった。つまり、中東戦争下のイスラエルで新しい人生を送っている。哲学教員も医師も、ともに文筆を始めた自由人だが、妹たちを共同体の掟と暴力から守ることはできなかった。

物語の途中でエミールは失踪する。マルセルは、チュニジア独立後の病院

でヨーロッパ系医師ニエルらが契約を打ち切られて帰国を余儀なくされると、次第に居心地が悪くなる。チュニジア太守（le Bey）が医局長を集めた催しで、部下のムザリ（Mzali）から、「だからトルコ帽を被っておくべきだったと言ったでしょう」（p. 197）と君主への恭順の不足をたしなめられる。しかし、いざ医局長のポストを捨てて出国するにあたり、これから実権を握るムザリから、「それでは、我等をお見捨てになるのですか、あなたも？」（p. 269）と白々しく言われて憤慨するまで、自分たちユダヤ系医師がヨーロッパ系に次いで煙たがられていたことに無自覚だったのである[21]。その頃、エミールはマルセルに、チュニスのユダヤ人地区に古くからあって、それゆえアラブ＝ユダヤ共生の象徴だったシディ＝マルドゥーム回教寺院（Sidi Mardoum）がブルドーザーで解体されようとしていると知らせた（p. 268）。明らかに祖国は変容しつつあった。

チュニスのリセの教え子は、精神的に不安定で、四度目の面会の後にピストル自殺する。

このように三人のヨーロッパ人女性の夫たちは、かろうじて逃げおおせたマルセルを除いて、独立前夜のチュニジアで捕囚の趣である[22]。

エミールとイミリオは互換的であるように読める。この小説は、普通字体、小さめの普通字体、大文字、そしてイタリック体で印刷されており、アラビア語とヘブライ語の書かれた挿画が 2 葉ある。マルセルはイタリック体で、他の字体の叙述に注釈する。物語の終盤は、「内陸王国の年代記」からの抜粋で、おそらくこれが後年の小説第四作『砂漠あるいはジュバイル・ウアリ・エル＝マンミの生涯と冒険』（1977）に発展するのだろう[23]。5 人目の語り手は作家、というか書記で、王太子である従兄に仕えている。

3. 帰郷と族外婚

『塩の柱』の主人公は結婚するには若すぎた。それでも族外婚が語られるのは、青年が敬愛するリセ国語教師マルーが、フランス人女性と結婚していたからである。マルーは先住民のベルベル出身の詩人で、ラシーヌの戯曲『アンドロマック』の授業で主人公の力量に注目していた[(24)]。だが、夫婦は折り合いが悪く、夫が妻に暴力を振るい、どうやら離婚したらしいと噂になっていた。青年にとってマルーは、「教養人に変貌した貧しいアフリカ人」（p. 237）という意味で、一種のロールモデル（模範）だが、教師仲間からは忌み嫌われていた。「違う人種と結婚するなんて！これが族外婚の末路だ！」（p. 238）と。あるいは、「フランス語をその権利継承者（ayants droit）よりも上手く操るあのよそ者（métèque）め！」（p. 241）とも。族外婚は、フランス人リセ教員の間では、攻撃的な異邦人性の指標となるが、主人公アレクサンドル・モルデカイ・ベニルーシュは、まだその知性によって異邦人であるに過ぎない。

ヨーロッパから帰郷した植民地の青年は、『アガル』では、ポストコロニアル状況下で経験する「族外婚」（mariage mixte）によって、ユダヤ人共同体への帰属を揺さぶられる。その帰属とは桎梏でもあった。まず、より率直に自伝語りがなされるメンミの文章を読んでみよう。

大学卒業後のメンミの帰郷は 7 年に及ぶが、「族外婚」の詳細はヴィクトール・マルカのインタヴュー『内部の土地』（1976）と回想記『動かないノマド』（2000）で語られている。メンミは前著の第 4 章「西洋の神秘」で、ソルボンヌで哲学を学んだ最初のフランス滞在中の結婚について、こう回想している[(25)]。

「彼女はフランス人で、ロレーヌ出身で、青い目のブロンドだった。私が東洋的であるのと同じほど西洋的だった――事実そうだし、神話的に言っても。それは私がパリに探しに来た綜合であり、一人の女性に肉化されていた」

しかし、まさしく「肉化」されていたからこそ、この「綜合」は実存的な問いとなる。「族外婚は私の困難の解決だったが、ある意味で困難が先送りされることでもある」。これはインタヴュアーが「あなたは『アガル』と『サソリあるいは想像の告白』で、族外婚を抑圧に対する解決として考察していますね」という問いに答えたものである。第5章「植民者と被植民者」では『アガル』について、「この本は随分誤解された。人々はそこに族外婚の断罪を見ようとした。まったく筋違いだ。私はその可能性をすべて見せようとしたのだ」。また、メンミは第6章「選択」で、インタヴュアーに、「『アガル』（1955）は植民者から妻を選んだ族外婚によって個人的な解決を模索したもの」だと、小説執筆の動機を説明している。メンミによれば、その後、「ある特定の社会的・歴史的枠組みの中では、個人的な決断をしたところで、植民者と被植民者［あるいは入植者と植民地現地人］の関係が織りなす社会的問題は未解決のままだ、と認めざるを得なかったから」、評論『被植民者の肖像』（1957）を書いた。そして、「植民地時代の末期に、私は自分のユダヤ人としての広がりが手付かずだと分かった」。メンミを敷衍して言えば、体験をまず小説『アガル』で、ヨーロッパ女性の妻を連れて帰郷した若い医師の物語として書いてから、次に植民地状況については『被植民者の肖像』を、ユダヤ人アイデンティティーについては『あるユダヤ人の肖像』（1962）と『ユダヤ人の解放』（1966）を書いた。邦訳で「差別の構造」と題され、ユダヤ人

を黒人、女性、植民地現地人と比較した『支配された人間』（1968）では[26]、二つの状況分析の「綜合に努めた」のである。

『被植民者の肖像』改訂版（1966）の自著序文で、メンミは『アガル』の執筆意図を、次のように説明する。『塩の柱』では自分の人生の「水先案内人に使った登場人物（personnage pilote）」が、それより先に進めなくなり、『アガル』で「族外婚によって脱出を試みた」。失敗したのは、これら 2 作品の主人公が「植民地の世界」にあったからで、「植民地における族外婚カップルの冒険と、その失敗を理解するには、植民者と被植民者について知り、おそらく植民地という関係性と状況が丸ごと分からねばならなかったのだ」[27]。このように、メンミの小説は、評論と密接に関連づけられるとともに、とりわけ『アガル』では小説それ自体が、メッセージを読者に受け入れやすい物語に落としこんだ「問題小説（roman à thèse）」[28] になっている。

回想記『動かないノマド』では[29]、第 6 章「帰郷」で、「チュニスのリセで物理を教えてくれたジャン・デビエスから〈戻るな〉と言われた」ことを語る。恩師が「自分は政治的理由で帰国すると思っていた」からである。メンミ夫妻が「到着してすぐに最初の爆弾が炸裂した。国の屋台骨が揺らぎ始めていた。脱植民地化が始まっていたのだ」。また、この章では小説『アガル』で描かれた艱難辛苦が次のように語られる。「覚悟はしていたが、私は二つの敗北を味わった。第一は、長男に割礼をさせたことである。二つ目は、割礼しても息子は、母親がユダヤ人でないために、ユダヤ人と見なされなかったことだ。それが私たちをなおも律していたラビの法であり、例えば〈私生児〉に相続させずにすむ、というご利益を伴っていた。私は法律家に相談した。妻の改宗に同意してくれるラビが見つかれば、それが解決法になるということだった」。

4. ユダヤ人アイデンティティーと共同体の法

これは『アガル』で、主人公が、大学教員である妻は共同体にとっても悪くない新参者だ、と水を向けたとき、ユダヤ人長老会の世俗議長をしているタイエブ弁護士が、「今日ではこの種の結婚は是認されないが、できる限りのことはしましょう」とにべもなく拒絶したことを思わせる。かつて医師は、この弁護士を、リベラル派の新聞に紹介したのだが、今ではすっかり「強固な保守派」になっていた[(30)]。

左派の弁護士は、もっと無責任で、医師の依頼を事件に仕立てて、旧弊な共同体を批判したがっていた。「解決法は二つしかない。息子さんを割礼させるか、宗教儀礼に則って結婚するかだ。（中略）試合の入り方がまずかった。全部をひっくり返さねばなるまい」（p. 122）。外国への帰化も選択肢とするこの弁護士と話しながら、主人公は「自分自身を裏切るか、それとも他者を裏切るかの二つの背信に、依然として囚われている」と感じる（p. 123）。ここに脱植民地化の歴史プロセスが加味される。左派の弁護士はフランス国籍を持っていたが、それは「父がそれを望んだからだ。だが、今や一つの国民が生まれた。このような行為は国民に対する背信となる。あなたにその権利はない」（p. 124）。つまり、チュニジアを裏切らねば、妻と同様にフランス国籍を取得して事なきを得ることはできず、チュニジア国籍を放棄したら、新生国家で父母と暮らし、医療を通じて社会的責任を果たすことはできない。

イスラエルに渡った友人に問い合わせた医師は、ユダヤ教で結婚式を挙げてはならないが、割礼はしろ、と助言される。「割礼は、神秘的儀式としてではなく、ユダヤ人の証明書として非の打ち所がない」（p. 135）からである。

ついに、チュニスの首席ラビが、執務室を訪れた医師に、「われわれはもは

や外国人女性を受け入れないと決めたのだ」（p. 140）と言いわたす。そして、「ヨーロッパで、この結婚を祝福してくれるラビをちゃんと見つけてみせます」（p. 141）と言い放った彼に、「できるものなら、そうしなさい、息子よ」と会見を打ち切るのだった。医師は新妻と首席ラビを訪れたのに、自分たちを一度も「子供たち」と呼ばなかったことに気づく。マリーは怒りを爆発させてラビを「老いぼれ」呼ばわりするが、彼が「それでも立派な老人の顔をしているよ、白い髭といい、あの立ち居振る舞いといい…」と「ラビを不器用に弁護し始めても、彼女の怒りに油を注ぐだけだった」（p. 142）。

物語は夫婦の破局に向かって次第に傾斜を強めるが、この場面で次のような心理分析が注目に値する。医師はマリーに「屈辱」という新しい感情を発見するが、それは蔑ろにされた「外国人」の妻だけの感情ではない。彼がラビを弁護したのも、以後はマリーと対立するのも、「自分自身の屈辱と戦うため」（p. 142）だった。若夫婦はまるでカフカの『城』のような不可解な状況に追いやられ、彼らの子の親権を認めないユダヤ系弁護士たちと首席ラビが、カフカの『審判』のような出口なしの状況を作り出す。だが、若い父親は、自分が共同体を裏切るまいとしていることに十分自覚的でなく、マリーの激昂にしばしば憤慨する。医師は時として自分が、タイエブ弁護士ほどではないにせよ、マリーに対して「強固な保守派」として振舞っていることに気づかない。

『アガル』で妻にはマリーと名があるのに、語り手である夫には「息子」「兄弟」と言われるだけで名が記されない。チュニジアの研究者アフィファ・マルズーキによれば、夫は「人の温もりを欲しており、故郷の街に戻るたびに家族に囲まれ、食事を供にしてもまったく苦にならない地中海人」で、「共同体の子」である[31]。ところが、まさしく共同体の掟のために、若夫婦は自

分たちの子に対する親権さえおぼつかない。母親はいつになく激しい口調で、「それにね、法の定めでは、それがお前の息子でさえないことを知っているのかい？」（p. 117）とアラビア語で言うのだった。

当時のチュニジアのユダヤ人社会では、第一子の誕生で喜びを分かち合う若夫婦は、名をエマニュエルとするか、それとも父方の祖父の名アブラハムとするかを選べなかった[32]。小説ではユーモアたっぷりに、弟の子も同じ日の朝に生まれたので、そちらは正確には何時だったのかと母親が問う（p. 110）。2 時間遅れで彼らには父の名を取り合う必要も、押し付けられる義務もなくなった。第一子の割礼も同様で、マリーは反対し、医師は優柔不断だが、結局、赤ん坊が病気にかかって事実上の包皮切除を余儀なくされる。彼は内心に「恥ずべき歓喜」（p. 145, 149）を見出す。顛末はこれもユーモラスである。病院にわざわざ学術用語で「フィモジスをお願いしたくて」と電話した医師に、「ああ、割礼ですね」と返答されて赤面するのである（p. 153）。

小説の結末で、医師はチュニジアを去る決意をした妻を引きとめない。彼女の最後の言葉は、「離してよ」（p. 189）だった。「ぼくはここで降りる。君はクルマを使っていいよ」。すると彼女は後部座席から運転席に移って、まっすぐ前を見ながら、すぐに発進したのだった」（p. 190）。

小説最後の数ページで、一人称話者は妻に、「抜きがたい異邦人性（étrangeté viscérale）」（p. 188）を見出し、「離して」と言った彼女の顔が、まるで「蛇のように自分の顔を締め付ける仮面」だと感じられ、ついには「今も分からない、どうして彼女の首を締めなかっただろうか」と自問する。『アガル』の医師は、潜在的には、『塩の柱』のリセ教員マルーのように妻に暴行する夫に成り果てている。それは、「彼女がいなくなっても、ぼくは自分が障害者に成り下がったことを忘れないだろう」と、族外婚によって消えない傷を負った被

害者として自己をイメージするからである。ヨーロッパから帰郷した青年医師は、共同体の掟を出し抜くつもりで、新妻に対して共同体を守る羽目になり、矢面に立って深手を負った。「離して」とは彼自身の言葉でもあったろう。

メンミは自分が考案した「依存（dépendance）」という社会学的概念[33]を巡るシンポジウムで、ジャック・アスンの報告「〈伝統〉と〈翻訳〉の間の背信について（依存の至高形態としての）」を次のようにコメントしている。「裏切り者はおおむね相対的な背信者だ。だから苦しむのである。ジャック・アスンは私の小説『アガル』に言及しようとした。この小説は族外婚を扱っている。主人公は裏切り者と見られており、自分でもそうだと思って、大なり小なりそう打ち明けている。なぜなら、彼は自己の所属集団に自分を裁く権利を認め、この集団の価値によって自身を裁いているからだ。とどのつまり、裏切り者は彼の依存を、揺さぶりつつ維持するのだ」[34]。24 年後の著作でメンミが用いた語で言えば、『アガル』は共同体の「依存者」の肖像を描いたことになる。それゆえ、『アガル』の随所に、「裏切り」と「恥」が書き込まれ、「ぼくは彼女を裏切り、彼女はぼくを破壊した」（p. 171）という背信者の自己懲罰を暗示する一節が記されたのであろう。

5. メタレベルの族外婚物語

第三作『サソリあるいは想像の告白』（1969）は、五人の語りが交錯する複雑な物語である[35]。登場人物の一人、哲学教員で作家のエミールはマリーというヨーロッパ人と「族外婚」をしており、もう一人の登場人物である医師マルセルはマリー＝シュザンヌと「族外婚」である。さらに、リセでエミールに習った青年 J.H. も、留学中にフランス東部ストラスブールでフランス人

女性ジャニーヌと結婚した。

エミールの書いた小説に『外国女（L'Etrangère）』がある。言うまでもなく創世記のアガル（ハガル）は、ユダヤの族長にとって「外国女」である。この小説で語られた妻の出奔の経緯が、事実に合わせて訂正される。エミールの経験と小説が対比されているが、そこに読者はメンミの小説『アガル』をも読むだろう。

『アガル』の医師は、妻を拒否する母親とユダヤ人共同体に苛立つあまりに、自分が彼女を孤立させていることに気づかない。ところが、エミールは、自分の族外婚を振り返って、「ぼくを選んだことで、マリーが自分自身の幸運をほとんど断念しており、またこの国のフランス人コロニーをのぞいてみれば一目瞭然だが、身内からも疑いの目で見られていたことを忘れていた」（pp. 154-155）と思い至る。この箇所は、あたかもメンミ自身がエミールに仮託して、自作『アガル』を論評するかのようである。エミールの妻の最後の言葉は、『外国女（L'Etrangère）』と『アガル』に書かれていたように「離して」ではなく、本当は、「私はあなたの母親ではない」（p. 187）だった。

異邦の女はたんに受動的な存在ではない。エミール、マルセル、教え子の青年ら、ヨーロッパ女性と結婚した人物の語りにおいては、独立とともにアラブ民族主義に傾くチュニジア社会の変化への対応で、妻と夫に著しい温度差がある。特にチュニジアを出国できたマルセルの場合、大病の後、妻から激しい口調で、あなたがここを去らないなら子供たちを連れて出てゆく、と宣言されて初めて事態の重大さに気づくほどだった（p. 265）。この物語は「腫瘍」という章に書かれている。医者の不養生ならぬ、植民地状況への無自覚の依存が、マルセルの心身を蝕んでいたわけである。

チュニスのリセの教え子には「若者（Jeune homme）」を示唆する « J.H. »

だけで名前がないが、さりとてたんなる「共同体の子」ではない。「そもそもジャニーヌと結婚したのは、外国人と結婚したかったからで、ぼくがすでに自分自身にとって外国人になってしまっていたからなのです」（p. 206）と、共同体への反抗の意思が見られる。だが、彼はストラスブールで知り合った女性を、「〈ぼくの〉宗教に改宗させる決心」（p. 211）をしてから結婚したと告白する。行き着いたのは、前述のように心のバランスを失った末の自殺だった。

6. 始まりの対幻想と想像の祖先

自殺した青年は、自分を共同体から引き剥がすとともに、結婚によって生じた対（カップル）から新たな伝統を始めようとした。これは「先祖」になる幻想である[36]。ストラスブールに住むジャニーヌの叔父は、青年が「完全には黒人でない」と知って安堵した、という（p. 206）。だが、娘がユダヤ教に改宗し、シナゴーグで結婚式を挙げると、「彼女は父が寺院の陰ですすり泣くのを聞いた」（p. 211）。故郷の伝統から切断された新妻もまた、チュニジアのユダヤ人社会が『アガル』で書かれた通りであるなら、婚家の伝統には加えられず、対を起点とする幻想に囚われてゆく[37]。

ならば、『サソリあるいは想像の告白』でチュニジアをヨーロッパ系の家族とともに離れるマルセルも、どこか別の土地で対幻想を紡ぐことになるだろう。それはアルベール・メンミが妻ジェルメーヌと暮らすことになる、パリの伝統的なユダヤ人居住地域、マレ地区なのかもしれない。

なお、小説第四作『砂漠あるいはジュバイル・ウアリ・エル＝マンミの生涯と冒険』（1977）は、ムスリムの侵入に抵抗した山岳部族に取材した伝奇小

説風の物語であり、族外婚をめぐる本論の対象とはしなかった。とはいえ、これもチュニジアのムスリム化（7 世紀末）以前にユダヤ教に改宗していたベルベル人を祖先に持つという、『塩の柱』以来の「アフリカ人アイデンティティー」と「ユダヤ人アイデンティティー」の小説表現と見ることができる。先祖は東ローマ帝国と結んでアラブ人の侵入に抵抗したベルベル人の女王エル・カヒーナ（la Cahéna）の部下だったかもしれない、というルーツ探しの物語は、『サソリあるいは想像の告白』の「メダル（および私たち一族の歴史）」という章に収められている。想像の祖先を思い描いた物語は、メンミの小説、彼の言葉では「物語（récit）」の基調と言える。

結論

このように、1950-1960 年代のメンミ小説をひとまとめにして読むと、マリーズ・コンデやパトリック・シャモワゾーらカリブ海域のクレオール語話者が、フランス語の文章語で書く壮大な物語に似ている。彼らの作品がラテンアメリカ小説を思わせるとすれば、メンミのそれは北アフリカ出身のユダヤ系作家＝知識人の自伝を小説に変奏したものと言えよう[38]。

ならば、初期のメンミ小説の特徴的主題は故郷からの旅立ちである。ただし、この「故郷」は、チュニジアでもあり、ユダヤ人共同体でもある。『塩の柱』の表題は、旧約聖書「創世記」で、「後ろを振り返るな」という神の使いの命令に背いたために塩の柱と化したロトの妻の事蹟を踏まえる。多分に自伝的なこの小説の主人公は、故郷からの旅立ちを決意する。だが、その後のメンミの小説には、作家の体験にもとづくキリスト教徒との結婚と、それに起因するチュニジアのユダヤ人共同体との軋轢が、独立に向かうチュニジア

社会の変化を背景に、確かな筆致で書き込まれた。そして、メンミが7年の「帰郷」の末に、作家として哲学教員としての職業生活を、新生チュニジアではなく、フランスで試みることになった動機と経緯も、インタヴューや回想記で語られる以上に、初期作品に書き込まれている[39]。

（本論文は平成29年度成城大学特別研究助成「移民の社会的統合における集団的記憶の働きについての比較文化的研究～現代フランスのユダヤ系およびアラブ系移民を例として」の研究成果である）

注

（1）　メンミ自身は、これらの作品を版元の著書リストで「物語（Récits）」と括っており、そこに回想記『動かないノマド（放浪の民）』（2000）も加えている。Albert Memmi, *Le Nomade immobile*, Arléa, 2000, 2003

（2）　カテブ・ヤシン、アシア・ジェバールらアルジェリア生まれで旧宗主国フランスの文芸メディアで、また翻訳を通じて世界で評価された作家を、ブルデューの文学場の理論を用いて論じ、彼らの創作の目的を「承認」と性格づけた博士号請求論文（パリ第3大学社会学）を参考にした。その単行本タイトルは、アルジェリア出身の哲学者デリダの『他者の単一言語使用』へのオマージュである。Kaoutar Harchi, *Je n'ai qu'une langue, ce n'est pas la mienne Des écrivains à l'épreuve*, Fayard, 2016 フランスの書店では「フランコフォニー（フランス語圏）文学」という、植民地の歴史認識を巡ってフランス人に罪悪感を抱かせない中立的な名称が好まれている。作家たちはむしろ「世界＝文学（littérature-monde）」と名乗ろうとしている。もちろん、フランコフォニーは中立な語ではなく、カナダ出身で英語を母語とし、フランス語と英語の両方で創作する小説家ナンシー・ヒューストンのように、ケベックで当地の言語ナショナリズムに組みこまれたことの不快さを表明した作家もいる。Michel Le Bris, Jean Rouaud, Eva Almassy, *Pour une littérature-monde*, Gallimard, 2007, p. 157

（3）　アルベール・メンミは Germaine Dubach と 1946 年末にパリで結婚し、1949 年夏、チュニスに教職を得て帰郷し、1956 年にフランスで研究職に就くまで約 7 年間、チュニジアにとどまった。夫妻には 3 人の子がいる。後述する小説『アガル』を

実話と受け取って、主人公の妻マリーが実在すると思った読者から、「奥さんは二番目なのですか」と問われた、という。Albert Memmi, *La Terre intérieure, Entretiens avec Victor Malka*, Gallimard, 1976, p. 116　また、帰郷後、チュニジア独立までの出来事を記録した日記を小説第 3 作『サソリあるいは想像の告白』（1969）に使ったと述べている。A. Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 89

（4）　Albert Memmi, *Portrait du colonisé, précédé du Portrait du colonisateur et d'une préface de Jean-Paul Sartre*, Payot, 1973

（5）　Albert Memmi, *Portrait du décolonisé*, Gallimard, folio, 2004 アルベール・メンミ『脱植民地国家の現在――ムスリム・アラブ圏を中心に』菊地昌実・白井成雄訳、法政大学出版局、2007

（6）　http://www.jeuneafrique.com/63601/archives-thematique/albert-memmi-la-d-colonisation-a-t-un-fruit-amer。2004 年 6 月 28 日掲載のインターネット版。パレスチナ占領地域の犠牲者にまつわる同様の比較が『脱植民地人の肖像』「後記」にも見える。A. Memmi, *Portrait du décolonisé*, p. 219

（7）　石川清子「アルベール・メンミ『脱植民地国家の現在――アラブ・ムスリム圏を中心に』」*Revue japonaise de didactique du français* 第 3 巻第 2 号、2008 年

（8）　田所光男「メンミにおけるアラブ＝ユダヤ共生言説批判」(I)（II)、『言語文化論集』名古屋大学、XXVII 巻第 1 号（2005)、第 2 号（2006）

（9）　「昨日は［79 歳の］誕生日だった。子供達、数人のファン、教え子らの電話。とても感動した。」A. Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 9

（10）　小説『アガル』1984 年改訂新版の自著序文にこうある。「この新版は、フランスの合法移民が 400 万人に達した時に世に出た。近年の帰化受理者、移民子弟、その縁戚、配偶者を加えると、まさにフランス社会は未曾有の課題に直面している。すなわち、いかにしてこれらの外国出身者すべてと共存すべきか。しばしば異質と言っていいほど異なった存在様式、そして典礼と心性の習慣を、いかにして素早く統合するのか。同様に、いかにしてこれら移植された側の固く結束した共同体が、自分たちに対するホスト社会の曖昧さに対処するのだろうか」(p. 19)。メンミによれば、「合法であれ違法であれ族外婚カップルは、集団の嵐の影響をその懐に受け止めかねないとはいえ、［ホスト側と新参者］双方の激動に対するひとつの回答である」。Albert Memmi, *Agar*, Gallimard, folio, 1984, pp. 19−20（orig. Editions Corréa / Buchet Chastel, 1955）

（11）　Albert Memmi, *Dictionnaire critique à l'usage des incrédules*, Félin, 2017 ; A. Memmi,

Testament insolent, Odile Jacob, 2009 ; A. Memmi（éd. Hervé Sanson）, *Penser à vif : de la colonisation à la laïcité* , Non Lieu édition, 2017

（12）　そのことは 1990 年代のメンミが、戦後のパリのユダヤ系知識人サークルで「居心地が良かったと言えば嘘になるだろう」と述べるのを妨げない。メンミは『パルデス』のパリのユダヤ学派特集号に短文「証言」を寄せて、戦争直後から 40 年に及ぶ交流の中で、「それが最重要の問題であると、今日なら当時よりもよく分かる族外婚」を論題に挙げても、ユダヤ教の伝承に照らして抒情的に解釈されがちだったとしている。判で押したようにアンドレ・ネエールの聖書講義とレヴィナスのタルムード解釈で始まる会合では、ユダヤ性と他の集団のアイデンティティを比較することや、アラブ人との関係について考えることが困難だった、ともいう。*Pardès*, N° 23, 1997, pp. 261-264　メンミにとって族外婚は、ユダヤ教以外の宗教文化に属する人々と理解し合う実践だったようである。雑誌発行人シュミュエル・トリガノによれば、「パリのユダヤ学派」は、ユダヤ人共同体の幹部養成校「オルセー校」と、1957 年に始まる「フランス語圏ユダヤ知識人シンポジウム」がその制度的土台にあり、学派は 1980 年代に衰退もしくは戯画化された、という。*Ibid.*, pp. 15-17

（13）　メンミはチュニスの匂いや味への愛着を、インタヴュアーの質問に答えて、「あなたの鼻を〈不愉快なほど〉突っつくが、涎も出てくるあの刺激臭」と、両義的に語っている。Albert Memmi, *La Terre intérieure*, p. 31　母国を離れたユダヤ系フランス語作家の比較研究として、それぞれギリシア、チュニジア、イラク出身の 3 人を扱った次の博士論文（パリ第 7 大学、指導教授はジュリア・クリステヴァ）が有益。Elisabeth Schulz, *Identité séfarade et littérature francophone au XXe siècle A. Cohen, A Memmi et N. Kattan Déconstruction et assimilation*, L'Harmattan, 2014

（14）　Albert Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 86

（15）　*Ibid*, pp. 11-12

（16）　サルトルは『被植民者の肖像』の序文で、メンミの仕事は「経験を形式化したもの」であり、「入植者（colons）による人種差別的な簒奪と、被植民者が将来的に構築するが〈そこに自分の場所があるかどうか疑わしい〉未来の国民（nation）との間で、自分の個別性を、それを普遍に向かって乗り越えながら生きようと努めている」と評す。A. Memmi, *Portrait du colonisé*, Payot, 1973, p. 24

（17）　1941 年 5 月 6 日の文部省令で、日本の中学 1 年生にあたる第 6 学級のユダヤ人定員は 20 パーセントと定められた。チュニジアには大学がなかったので主人公が進

学を期待したのはアルジェ大学ということになるが、そのユダヤ人定員は 3 パーセントである。Paul Sebag, *Histoire des Juifs de Tunisie Des origines à nos jours*, L' Harmattan, 1991, pp. 230 チュニジアのユダヤ系住民の概数とその算出法については註（22）を参照。スバグはメンミの同僚教員で、当時はチュニジア共産党の指導者だった。Albert Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 85

（18） A. Memmi, *Le Statut du sel*, Gallimard, 1966, p. 288, p. 293, p. 309（orig. Corréa, 1953）第 3 部第 2 章「他者」、第 3 章「戦争」、第 4 章「労働キャンプ」参照。Paul Sebag, *op. cit.*, pp. 230-244　メンミ自身も寮監をしたが、ヴィシー政権の法令に反発して辞職し、さらにアルジェ大学を 1942-1943 年度に退学する。哲学の高等教育修了証を論文「文明の解釈、チュニジアのユダヤ人の場合」で取得した。論文の一部（ユダヤ人の服装）が論文集に見える。Memmi, *Penser à vif*, pp. 71-78

（19） A. Memmi, *Agar*, Gallimard, folio, 1984 その根拠を「3. 帰郷と族外婚」に記した。註（25）（26）も参照。

（20） A. Memmi, *Le Scorpion ou La confession imaginaire*, Gallimard, 1969 原書の引用を本文中に（p. 103）と指示する。

（21） この人物に 1954 年 3 月から一ヶ月の短命政権を率いた首相 M. S. Muzali を読めるかもしれない。チュニジアは 1956 年 3 月に独立する。

（22） チュニジアのユダヤ系住民の総数を知るのは容易でない。チュニジア国籍だけなら、1936 年の調査で 59,485 人、1946 年には 70,971 人である。年齢別・性別の数字は 1946 年になって初めて分かった。これに多数のフランス、イタリア、イギリスなどの国籍を有する外国籍ユダヤ人がいる。ヴィシー政権が 1941 年に行った調査によると、これら外国籍は 21,402 人になる。1946 年のユダヤ人口は自然増を含めて 9 万から 9 万 5 千と推計される。フランスへの帰化は、植民地宗主国の政策に左右される。まず、戦争中の 1944 年に帰化したユダヤ人はわずか 4 人だったが、メンミが帰郷した 1948 年には 69 人、独立間近の 1955 年には 283 人に増えた。次に、ドゴールの臨時政府は 1940 年 6 月 10 日に遡って出生地主義を適用したので、その日以降に生まれたユダヤ人は、両親がイタリア国籍であっても「ユダヤ系フランス人」になった。Sebag, *op.cit.*, pp. 253-259 スバグは 1946 年から 1956 年にかけての出国を、出生数と死亡数の差から 2 万 5 千ないし 3 万と推計し、旧約聖書に倣って「脱出」と呼ぶ。*Ibid.*, pp. 278-280 この表現は中東紛争の激化に伴ってアラブ諸国からユダヤ系住民が出国した現象一般にも使われる。チュニジアからの「脱出は六日戦争でピークに達する。（中略）ユダヤ人は出国できた

が、一人あたり 1 ディナールしか、つまり 1.5 ユーロしか持ち出せない」。Moïse Rahmani, *L'Exode oublié des Juifs des pays arabes*, Raphaël, 2003, p. 331

（23） A. Memmi, *Le Désert ou La vie et les aventures de Jubaïr Ouali El-Mammi*, Gallimard, 1977　その証拠に、エミールが語る「我らの祖先の物語」に、ベルベル系ユダヤ教徒の女王カヘナ（あるいはエル・カヒーナ la Cahéna）に仕えたエル・マンミ（El-Mammi）が登場する（p. 28）。

（24） A. Memmi, *Le Statut du sel*, p. 128 原書の引用を本文中に（p. 237）と指示する。

（25） A. Memmi, *La Terre intérieure,* p. 102, pp. 115-116, p. 141

（26） A. Memmi, *L'Homme dominé,* Gallimard, 1968

（27） A. Memmi, *Portrait du colonisé,* Payot, 1973, p. 9

（28） S.-R. Suleïman, *Roman à thèse ou l'autorité fictive*, PUF, 1983

（29） A. Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 80, 81, 84, 90

（30） A. Memmi, *Agar*, Gallimard, folio, 1984, p. 133-134 原書の引用を本文中に（p. 122）と指示する。チュニジア独立前後のユダヤ人共同体の再編についてはスバグ前掲書を参照。独立後はムスリムの慣習法に倣ってユダヤ人の Statut personnel（170 条におよぶ一種の民法）が定められたが、現地のユダヤ教の律法は、相続に関してこの規定よりも女性配偶者の立場が弱かった。独立を機にラビ法廷は 1957 年に廃止され、信徒団体も再編される。Sebag, *op.cit.*, pp. 285-292

（31） Afifa Marzouki, *Agar d'Albert Memmi*, L'Harmattan, 2007, p. 33

（32） Marzouki, *op. cit*., p. 63

（33） A. Memmi, *La dépendance Esquisse pour un portrait du dépendant, suivi d'une lettre de Vercors, avec préface de Fernand Braudel*, Gallimard, 1979 副題はこれも「依存者の肖像のための素描」である。

（34） A. Memmi, « Postface », *Figures de la dépendance autour d'Albert Memmi*, colloque de Cerisy-la-Salle, PUF, 1991, p. 275 ; Jacques Hassoun, « De la trahison entre « tradition » et « traducere »（comme forme suprême de la dépendance）» , *op.cit.*, p. 252

（35） A. Memmi, *Le Scorpion ou La confession imaginaire*, Gallimard, 1969 原書の引用を本文中に（p. 206）と指示する。

（36） 対（カップル）から新たな伝統を始めるという着想は、吉本隆明『共同幻想論』と柳田国男『先祖の話』から得た。

（37） メンミの友人のユダヤ系女性は、キリスト教徒男性と結婚するために改宗したが、教会の奥で泣く父親の幻想に苦しんだ。メンミが 1952 年にチュニスに開いた心理

教育センターの通院者の証言も小説の素材になった。A. Memmi, *Le Nomade immobile*, p. 91

(38) 本論はメンミの初期 3 作を対象としたが、ユダヤ人アイデンティティの探求という観点からは、作家がフランスに移住した後に執筆した第 3 作から第 5 作までを、エジプト出身のフランス語詩人エドモン・ジャベスの主題系「亡命、砂漠、書くこと」で論じた次の研究が有益である。Anny Dayan-Rosenman, « Albert Memmi: l'exil, le désert, l'écriture », *Pardès*, 21, 1995, pp. 182–196

(39) メンミは『塩の柱』の青年よりも高学歴になったが、半世紀後に、試験の顛末をこう回想している。ソルボンヌでアグレガシオンの審査委員長に呼び出されて、チュニジア国籍では教育公務員の受験資格がない、と言い渡された。フランスが保護国に提供した便宜を盾に抗弁したメンミに、委員長は肩をすくめ、「植民地的希望ということにしておこう」と言った。*Le Nomade immobile*, pp. 66–67 なお、1920 年生まれのメンミと、同郷だが 1927 年生まれの女性作家・弁護士ジゼル・アリミを比べると、後者がチュニジアで弁護士資格を得たように、独立前夜の保護国で教育格差が改善されたことが「社会上昇」とユダヤ共同体への背信の描き方に影響している。拙論「民族史と現代史のはざまの回想（1）: ジゼル・アリミ（Gisèle Halimi）『オレンジの樹の乳』をめぐって」『ヨーロッパ文化研究』24, 2005, pp. 17–62 と「民族史と現代史のはざまの回想（2）: ジゼル・アリミ『フリトゥナ』における再話について」同 25, 2006, pp. 27–51 を参照。